
ある少女の、夢の話し

すず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少女の、夢の話

【Zマーク】

Z0401C

【作者名】

すず

【あらすじ】

これは、少し悲しい少女の話。

(前書き)

興味を持つてくれた方、誠にありがとうございます。この作品は少々暗い内容なので、ご了承のうえ、お読み下さりませ。

輝く海辺。

『輝く』ではない……私の夢。

晴空はこいつだつて遠くて遠くて……。

頬を撫でる、柔かな風。

ふりしだれの雨、真っ白な雪……。

全て、私には無いもの。

例えば土曜日の午後も、日曜日のあつたかさも……。

私には遠すぎた……。

私に与えられたものは、白いベッドと白い天井。
1つだけの窓と、徐々に弱っていく体……。

たつた、これだけ。

これだけの為に、私は他の全てを失った。

どんな病気なのか、それすらも知りや。

こいつが死ぬとも解らぬい命を抱え、日々を恐怖し生きてこら。

最初はただの検査入院のつもりで。

行つてきますつて家を出で……それが、最後になつた。

たぶん、もう、家には帰れない。

医者と両親の態度で、なんとなくさう思つた。

重ねてきた15年も……美容師になる夢も……。

『死』の前では、無意味に変わった。

そして生きる意義を失つたその晩。

私は、一人病室で泣いた。

ある春の日……。

私はいつものように、窓から外を眺めていた。

特に何を見ているわけでもなく、ただ『外』を見ていた。

なんの感傷も、感情もなく……ほんやりと……。

過ぎていくのは静かな時間だけ。

そこには楽しい思い出も、心に響く感動もない。

言つなりば、限りなく無意味に近い平和。

人間は慣れる生き物だつて、誰かが言つてたけど。

確かにその言葉は目的を得てゐるなつて思つた。

だつて、何もかもが白いこの部屋は、とても普通とは言ひがたい。

けれど、いつの間にかその異質の空間は……。

私の日常に、為り果てていた。

ある春の日。

自分で起き上がれなくなつた今でも、私は窓から空を眺めている。

それは、介護用のベッドを操作するのにも慣れた私の日課。

空は一面の青で、雲の白れとのコントラストが映えていた。

流れの風や、暖かい陽の光を感じる事は出来なかつたけど……。

その時だけは、今の現実を忘れる事が出来たから。

だから、私は夢想する。

二つめ、あの森の木を歩く。

たとえそれが叶ひことのない望みだつたとしても。

願わざには、いられなかつた。

蝉の鳴き声を、窓越しに聞いていた。

どことなく寂しさを含んだその歌は、一瞬を生きるモノ達の叫び
なのだから。

首を動かすのも辛いけれど……私は外を眺める。

光に満ちた世界を夢見て。

ある夏の日。

流動食すら禁じられ、私の口は役目を終えた。

腕に繋がれた細いチューブ……そんなか細いチューブが、今の私
を生かしている。

その日、私は決意した。

白い部屋にやって来て、初めて私が抱いた決意。

それは、きっと、最後の望み。

ある春の日。

私が白い部屋に移り住んで、一年が経つとしていた春の日。

もう動かないと思っていた腕を動かして、私は窓を開ける。

いや、正確には窓を『呑み割った』。

勿論、素手で、ではない。

病室に備え付けられていた花瓶を、窓に向かって振り下ろしたのだ。

たつたそれだけの動作で、私は悲鳴をあげそうになつた。

それを堪えられたのは、窓から吹き込んできた風を感じたからだ。

ああ……こんな何でもない事が、何故これほど愛おしいのか……。

伸ばし放題になっていた髪の毛がフワリと舞つて……。

ホロリ、と、涙が溢れた。

さあ、行こう……。

それが私の最後の望み。

筋肉は衰え、関節は軋む……壊れた人形みたいな体に鞭を打つて、
窓から顔を出した。

そんな事を考えた。

地上九階の景色は……。压巻の一皿に呑まれる。

……生まれ変わつたら、鳥になりたい……。

鳥になつて大空を飛べたら……どんなに素晴らしいんだろう。

今私は人間だから、落すことしか出来ないけど。

次はきっと、鳥になつて。

さあ、行こう。

私の心は、これまでにないくらい澄みきっていた。

ふつ、と息を吸い込んで……。

私は、重力に引かれた。

一瞬が、まるで永遠の様に感じられた。

私は今、どんな顔をしているんだろう？

笑ってる？

それとも、泣いている？

うん、
多分私は泣いてる。

「おんなじ、

「おんなじ、おんなじ。」

「おおむね二、三ヶ月です。

「おおむね二、三ヶ月です。

「めんなさい、私。

今まで、ありがとうございます。

永遠の様な時が、
一瞬に収束されて

私は空へと手を伸ばす。

今なら掴めるかもって、そう思ったけど……。

ああ、やっぱつまらないや……。

私は地面へと墜落した。

後にはただ、 静寂だけが残つた。

(後書き)

読んでくれた方、ありがとうございます m (—) m 正直なところ
勢いで書きました故お見苦しい箇所が多々ありましたかと思います
が、それも作者の力不足です。 精進して行きたいと思っていま
すので、機会がありましたら、是非読んでやってください m (—)
m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401c/>

ある少女の、夢の話し

2010年11月24日06時02分発行